

第 46 回全国大会 オンラインにて開催！

2021年1月24日に、延期していた全国大会がオンラインにて開催されました。大勢の参加、ありがとうございました。

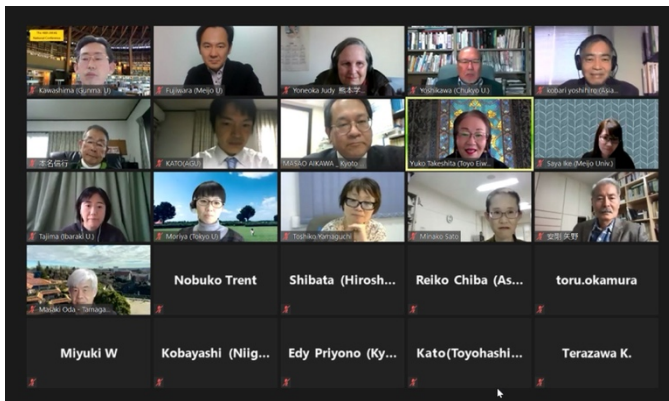
第 46 回 全国大会

総合司会:米岡ジュリ(熊本学園大学)

13:00-13:05

大会実行委員長挨拶:川島智幸(群馬大学)

会長挨拶:竹下裕子(東洋英和女学院大学)



基調講演

13:05-13:55

「フィリピン英語と日本の英語教育」

小張順弘(亜細亜大学)

司会:相川真佐夫(京都外国語短期大学)

研究発表

司会:米岡ジュリ(熊本学園大学)

14:00-14:25

1. ショッピングモールノルジン・ラムにおける若者たちの「群居言語」としての英語—多言語社会ブータン王国における市場の言語調査から

佐藤美奈子(京都大学)

14:30-14:55

2. Reviewing the attitudes of Japanese learners toward non-native English accents
KAWASHIMA Tomoyuki (Gunma University)

15:00-15:25

3. Comparative Survey on ELF Awareness among EFL Japanese Students (JS), Prospective Japanese Teachers of English (PJTE) and International ELF students (IS)
NAKAMURA Yuji (Keio University)

司会:藤原康弘(名城大学)

15:30-15:55

4. 日本人の大学生が英語授業で求める力 — 『英語学習に関する調査』から考える課題と指導の在り方
加藤洋昭(青山学院大学)

16:00-16:25

5. 「言語使用」観を再考する —日本における英語との「関わり」
田嶋美砂子(茨城大学)

16:30-16:55

6. 夜間定時制高校に通う外国ルーツの生徒たちに見られる英語を中心とした言語観
森谷祥子(東京大学)

16:55-17:00

閉会の辞:小田眞幸(玉川大学)

17:00-17:15

会員総会



No.54 もくじ

第 46 回全国大会 基調講演レビュー

田嶋 美砂子 (茨城大学)

研究発表レビュー

池 沙弥 (名城大学)

藤原 康弘 (名城大学)

私の研究

English-medium instruction(EMI)の“E”とトランスランゲージング(translanguaging)

柴田 美紀 (広島大学)

コロナ禍のブータンと国語・英語・民族語

佐藤 美奈子 (京都大学大学院)

書籍紹介

The Routledge Handbook of World Englishes (Routledge Handbooks in Applied Linguistics) 2nd Edition by Andy Kirkpatrick (Ed.)

Yuko Takeshita

『対抗する言語—日常生活に潜む言語の危うさを暴く』

仲 潔

第 46 回全国大会 基調講演レビュー

田嶋 美砂子 (茨城大学)

第 46 回全国大会は、「フィリピンと言えば、小張先生」という紹介とともに、小張順弘先生による基調講演で幕を開けた。実は私がこのフレーズを耳にするのは今回が初めてではない。別の研究会に参加し、小張先生のご発表を拝聴したときも、司会者はこのような紹介をしたと記憶している。小張先生のフィリピンに関する

ご造詣の深さが世に周知されていることがよくわかるエピソードである。

さて、自分語りで恐縮だが、私は中学校・高等学校に勤務していた頃、研修プログラムの引率で、複数回フィリピンを訪れたことがある。昼間は勤務校と同系列の修道院が運営する姉妹校を訪問し、夕方にはその修道院の庭に片道数十分の距離を徒歩でやって来るストリートチルドレンと交流するというプログラム。同じ敷地内であるにもかかわらず、そこに集う子どもたち（姉妹校に通う生徒とストリートチルドレン）の間にある貧富の差を実感する毎日であった。あれから約 10 年。日本・フィリピンともに幾多の変化があり、同時に不変の側面もある中で、昨今最も顕著なのは、両国の関係性を語る上で「英語教育」という切り口が出現したことであろう。今回のご講演はまさにそのことについて深く考える大変よい契機となった。

小張先生はご講演の中で、「フィリピン英語」（フィリピン社会・文化を背景とする多言語環境に根付く英語）と「フィリピンの英語」（国際ビジネス環境で商品化される英語）を区別し、特に後者と日本の英語教育との関連性について述べられた。小張先生によると、「フィリピンの英語」が商品化された背景には、フィリピン人海外労働者（Overseas Filipino Workers (OFW)）の増加や同国におけるコールセンター産業の興隆といった社会的・経済的な文脈が存在するという。そのような文脈を基盤として、「フィリピンの英語」は 2000 年以降、日本の教育分野の中でも主に私教育領域に、2010 年以降は公教育領域にも参入するようになった。これにより、フィリピンの人々に対する心象は、「元エンターテイナー」や「貧しい国の出身者」という負のイメージから「英語に堪能な国際人」



研究発表レビュー

池 沙弥 (名城大学)

という正のイメージへと変化を遂げたとのことである。

しかし、このような現状にはさまざまな課題もあるという。小張先生はご講演の中で、英語教育に従事する者が今後向き合うべきこととして、具体的に以下の5点に言及された。

- (1)世界的な英語普及に対する認識の深化
- (2)言語教育関連の学术界と産業界との連携方法の模索
- (3)日本型英語教育のグランドデザイン
- (4)「フィリピンの英語」を活用した英語教育実践例の蓄積
- (5)人や社会・文化、関連諸要因(特に経済的要因)を視野に入れた言語研究

再び自分語りをすれば、私自身の研究領域の1つとして、フィリピン系オンライン英会話産業におけるジェンダー問題が挙げられる。これは上記の(5)に該当する分野であると言えよう。一方、このニュースレターをご覧になっている研究者の中には、(1)~(4)を専門とされる方も多いように思われる。小張先生のご講演を拝聴し、今後は日本「アジア英語」学会という場で、それぞれの専門分野における知見を集結させ、上記の課題に協働的に取り組むことができたらと考えた次第である。同時に、ご講演中に提示された多岐にわたるフィリピン関連情報に触れ、また、このレビューを書く機会を通じ、かつてかの地で過ごした日々やそこで出会った人々に思いを馳せる大変貴重な時間ともなった。研究という意味でもフィリピンとの私的なつながりという意味でも、非常に刺激的なお話を共有してくださった小張先生にはこの場を借りて厚くお礼申し上げたい。

基調講演の後、合計6本の発表が行われた。オンライン開催で移動の負担がなくなったこと、またコロナ渦で今年度初の大会であったことから発表応募も通常よりも多かったという。前半は熊本学園大学の米岡ジュリ氏の司会で行われた。

最初の発表は佐藤美奈子氏(京都大学)による「ショッピングモールノルジン・ラムにおける若者たちの「群居言語」としての英語—多言語社会ブータン王国における市場の言語調査から—」である。ブータン王国の首都中心部にある市場ノルジン・ラムにおいてどのような言語選択がなされているのか、またその選択の背景は何なのかを、詳細な観察とインタビューにより明確に描き出した。共通言語が2つ以上ある市場でのやり取りから、商人は客に合わせて英語を選択しているにもかかわらず、客である若者たちはゾンカ語をソト言語として商人との会話で、そして英語をウチ言語として仲間同士での会話で使い分けていることを指摘し、この言語切り替えと言語併用は移民2世の若者たちが言語の規範化を進めていくことで作り出される言語社会化であると結論づけた。

次の発表は機材トラブルにより急遽順番を入れ替える形で、中村優治氏(慶応大学)による英語での発表「Comparative Survey on ELF Awareness among EFL Japanese Students (JS), Prospective Japanese Teachers of English (PJTE) and International ELF students (IS)」となった。EFLとして英語を学ぶ日本人学生グ



グループ、英語教職課程に在籍する日本人グループ、そして英語で専門科目を学ぶ外国人留学生グループのそれぞれで、共通語としての英語(ELF)の概念に対してどのような態度を持っているのかを調査した結果が報告された。多様なアクセントに対する寛容性については教職課程の学生と留学生グループに共通して高い意識が見られた一方で、特に教職課程の学生グループで英語の教育モデルはアメリカ英語・イギリス英語であるべきだという姿勢が強く表れていたことも明らかになった。また、自国文化を説明する自信の無さは教職課程在籍の学生にも見られ、さらなる英語力の向上を必要としている意識が確認された。これらの結果から中村氏は、特に将来の英語教育を担う教職課程在籍の学生たちが ELF の概念を理解することが大切であると主張した。

そして、その後無事に機材トラブルが解決した川島智幸氏(群馬大学)による発表「*Reviewing the attitudes of Japanese learners toward non-native English accents*」が英語で行われた。センター試験の英語問題を10名のノンネイティブスピーカー(NNSs)による音声に変更して(<https://real-english.health.gunma-u.ac.jp/>)138名の大学生と185名の高校生に聞かせて態度調査を行った結果、高校生と大学生の間では態度にほとんど差がないことや、3割以上の参加者が難易度に関してコメントしたことを報告した。また、少数ではあるがNNSの英語に対する不快感を示すコメントが見られたことを指摘し、中村氏と同様にアクセントに対する tolerance (寛容度)を正確に測ることのできるスケールの必要性と寛容度を高める英語教育の必要性を主張した。

前半の発表では英語を共通語として使用している現場からの報告と、共通語としての働きを理解させようとする日本での試みの報告があり、それぞれの場面での課題が浮き彫りとなったセッションであった。

藤原 康弘(名城大学)

本大会の後半の研究発表では執筆者の司会で3件の研究発表が行われた。以下にその概要を記録する。

まず、加藤洋昭氏(青山学院大学)による「日本人の大学生が英語授業で求めるカー『英語学習に関する調査』から考える課題と指導の在り方」の発表では、日本人の大学生を対象とした英語学習に対する意識調査の結果が報告された。その結果、この調査が対象とした初級の英語学習者は、4技能のいずれも「得意ではない」と回答しながらも、「スマートフォンや自動翻訳などの発達のため、英語を学習する必要はない」とは考えていないことが明らかとなった。その結果をふまえて、同様の背景を有す英語学習者向けに、どのような英語教育が求められているかについて示唆を行った。

次に、田嶋美砂子氏(茨城大学)による「言語使用」観を再考するー日本における英語との「関わり」ー」の発表では、いわゆる「言語学習」や「言語使用」でとらえきれない人と言語の関係性(たとえば言語に関する人々の語り)を言語との「関わり」(engagement)と定義して、その新概念を用いることで、応用言語学、社会言語学の分析的枠組みを再検討することを主張した。

そしてその新概念である「関わり」を軸に、英語に関連する言語景観や広告のデータ、フィ



リピン人によるオンライン英会話における日本人学習者の語りなどの豊富な事例を基に、日本における「英語使用」は本当に「ない」または「少ない」と言えるか、また「英語使用」観を基盤として国家を分類することの意義に疑問を投げかけた。

最後に、森谷祥子氏（東京大学大学院）は、「夜間定時制高校に通う外国ルーツの生徒たちに見られる英語を中心とした言語観」と題した発表で、日本における言語的マイノリティである外国ルーツの生徒たちへの言語教育環境や言語観などの調査の必要性を訴えた。氏は東京都内の定時制高校に通う生徒や同校の教職員へのインタビュー、資料調査、アンケート調査をとおして、彼らの英語、日本語、親の母語の3点に関する考え方を分析した。結果として、「グローバル＝英語」、「日本＝日本語」という、日本社会におけるマジョリティの典型的な言語イデオロギーが内面化されていること、母語に対する正負の印象は各家庭や個人に左右されることを報告した。

後半の発表では、「アジアにおける英語の普及と変容」を対象とする、本会の研究射程の多様性を如実に示す内容であり、今後の更なる展開が期待できるセッションであった。

私の研究

English-medium instruction(EMI)の“E”とトランスランゲージング(translanguaging)
柴田 美紀（広島大学）

グローバル社会で高等教育の国際化が進み、他国からの学生獲得のため English-medium

instruction (EMI)の授業やプログラムを提供する大学が世界中で増えている。今やアメリカやイギリスなどの英語圏に行かなくても自国において英語で授業を受けることができるのである。日本も例外ではない。私が所属する、広島大学総合科学部国際共創学科(Integrated Global Studies, IGS)は定員数の半分を留学生枠とし、海外リクルートに力を入れている。IGSの授業は概ね英語で行われているが、実際の言語事情は複雑である。IGSに入ってから英語力を伸ばしたいと入学する日本人学生は、留学生の英語の上手さと積極的な発言に圧倒され、かつ流暢な日本語を話す留学生や日本語を上達させたい留学生の日本語使用に押され気味である。そして、英語力を上達させるため留学生と英語で話したいけれど、上手く話せないし、留学生の日本語が上手なのでつつい日本語を使って楽をしてしまう自分に後ろめたさを感じている。こうした日本人学生は「英語力と発言内容に自信がない」ことを理由に寡黙である。この負のスパイラルには、日本人の英語コンプレックスに加え、EMI=English オンリーという単一言語的イデオロギー(monolingual ideology)も影響しているであろう。

本来 EMI とは英語力の向上が目的ではなく、アカデミックな内容を学ぶことにある。しかし、講義内容を十分かつ的確に理解する英語力が備わっていないため、授業についていけない日本人学生がいる。授業料を払っているのに学べないとは詐欺ではないか。私が学生なら憤慨するところである。英語力も一様ではないが、EMIの教室は言語文化的背景も多様である。異なる国や地域から来ている留学生の母語や文化は様々であり、英語オンリーの単一言語的イデオロギーはこうした多様性を覆い隠してしまう。



そこで、この英語力と多様性の問題をトランスランゲージング(translanguaging)から考えてみた。

トランスランゲージングは *trans-language-ing* であり、*languageing* という考えに基づく(この点については Li (2018)を参照されたい)。私たちは何かしらの「言語」使用者であるが、ひとつの(方言も含めて)言語体系しか知らないという人はほとんどいないであろう。程度の差こそあれ私たち一人ひとりには複数のことばの集大成を内在している。従来、応用言語学の分野ではひとつ以上の言語を駆使する人をバイリンガルあるいはマルチリンガルと呼び、同一人物が異なる言語を使う現象をコードスイッチングと呼んできた。コードスイッチングの「コード」とは国家や民族との結びつきを前提とした、単位として数えられる「言語」(例えば日本語、スペイン語)を指す。しかし、トランスランゲージングとは英語、日本語、中国語というコードの間を行ったり来たりするのではない。その本質は、進行形 *ing* が表すように、スムーズな伝達や理解のために(単位としての言語ではなく)個人が持つことばのリソースを創造的かつ複合的に使う様相である。そして、音韻的・形態的・統語的規則に則った体系的なことばの使用を通じて「言語」の枠が認識され、単体の言語が浮き彫りになることもある。

単位としての言語は、語学力の有無あるいは程度(不十分さ・不完全さ)を測るモノサシにもなっている。EMIのクラスでは英語力が低い学生は「授業が分からないのは英語力に問題がある」と自分の英語力の乏しさを嘆き、学習不安が募る。こうして、英語力の程度がEMIの恩恵を被るものとそうでないものを分断し、不平

等さを生み出していく。しかし、そもそも理解とは人間の認知と深く関わっており、あくまで言語は理解を助ける一助である。この点も考慮したトランスランゲージングでは、言語に限らず個人が持つあらゆるリソースを用いること(multimodality)を主張する。これはまさにEMIの授業で不可欠な姿勢であり、学問を修めるために教員も学生もマルチモーダル(multimodal)なリソース(例えば、文章、空間、視聴覚的情報など)を創造的に使えばよい。EMIの本来の定義(注参照)からすれば英語が共通言語ではあるけれど、それは決して英語オンリーという極論ではなく、学生や教員の母語やそれ以外の言語を排除するものでもない。加えて、ことばの創造的使用が個々人の学業成就を促すであろう。こうした緩やかなEMIは、人間本来の認知的営みからすると自然である。昨今、「教育的トランスランゲージング(pedagogical translanguaging)」という観点からEMIの議論が進んでいる(ただし、その実践については今後の研究が待たれる)。EMIを推し進める日本の高等教育機関は単一言語的イデオロギーから脱却しトランスランゲージングからEMIの在り方を検討することが急務であろう。自国の学生がEMIの恩恵を被ることができず教室でマイノリティになってしまうのは本末転倒なのだから。

注: The use of the English language to teach academic subjects (other than English itself) in countries or jurisdictions where the first language of the majority of the population is not English (Macaro, 2018, p. 1).

【参考文献】

Li, W. (2018). Translanguaging as a practical



theory of language. *Applied Linguistics*, 39, 9-30.

Macaro, E. (2018). *English medium instruction*. Oxford University Press.

コロナ禍のブータンと国語・英語・民族語

佐藤 美奈子 (京都大学大学院)

ヒマラヤの 7,000 メートル級の山々も COVID-19 の侵入を遮ることはできなかった。ブータンでは、2020 年 3 月 5 日夜に最初の感染者(76 歳のアメリカ人旅行者)が確認された。しかしながら、人口 70 万人の小国の動きは迅速である。翌日 6 日には、感染者が訪れたティンブー、パロ、プナカの 3 県の学校やオフィスは閉鎖、外国人観光客の受け入れ停止が発表された。インド国境付近の児童と教師は内地へ一斉集団疎開となり、3 月 25 日にはテレビ放送を活用した e-learning プログラムが開始された (平山 2021)。ブータン保健省 (Ministry of Health, Bhutan) の報告によると、以来、現在 (2021.2.17) に至るまでブータンの感染者は 866 人、死者 1 人という状況である。

ブータンでは現在、このパンデミックに端を発する 2 つの「言語」問題が、SNS で国民の注目を集めている。第 1 の問題の発端は、ブータン初の感染者が確認された 2020 年 3 月 5 日から 1 週間後、2020 年 3 月 11 日に起こった。ブータンの首相 Dr Loray Tshering が COVID-19 に対する政府の用意の現状について開いた記者会見 (press conference) で、ブータン人のジャーナリストたちがブータンの国語であるゾンカ語 (Dzongkha) ではなく英語で質問をしたのである。記者会見は、BBSTV 放送 (ブータ

ン唯一の TV 局。ゾンカ語と英語で放送される) による生中継であったが、ジャーナリストたちの質問の間、TV 局は、突然放送を中止し、ゾンカ語による音楽に切り替わった。記者たちがゾンカ語を話さなかったことに対して、有識者や高学歴者から非難が寄せられるなか、一般の人びとからは、「死のウィルスよりも、ゾンカ語で記者会見をすることがなぜそんなに重要なのか」という声が SNS を通じて広がり始めた。記者会見の翌日には、“The senseless hullabaloo over Press” という記事が Facebook に投稿され、「コロナウィルスと闘うために何をすべきか」を話し合うべき席で、議論の焦点がジャーナリストに対する誹謗中傷へと移ってしまった」、「(これは) ゾンカ語ポリシング (Dzongkha policing) (ゾンカ語を維持のための監視や取り締まり) である」、「記者会見は・・・ゾンカ語の奨励 (promote Dzongkha) ではない」という主張が寄せられた。

一方、学校教育で民族語が一切、排除されながらも、これまで一度も民族語運動らしきものが起こらなかったブータンにおいて COVID-19 は、民族語に対する新たな動きを喚起した。2020 年 3 月ごろから次々と、若者を中心として、シャーショプカ語 (Sharchoepkha 国内話者 23%) (van Driem 1994: 4) やクルテップ語 (Kurtoepkha 同 1.7%) による等の民族語により、その言語話者である若者自身が自らコロナ禍を説明する動画を作成し、facebook に投稿するという現象が起こり、連鎖反応のように広がり始めたのである。2020 年 3 月 27 日に投稿された若い女性による、クルテップ語による動画は、全体で約 4 分 30 秒で、若い女性が自身のクルテップ語でコロナウィルスとはどのようなものであり、うがいや手洗い、マスクの



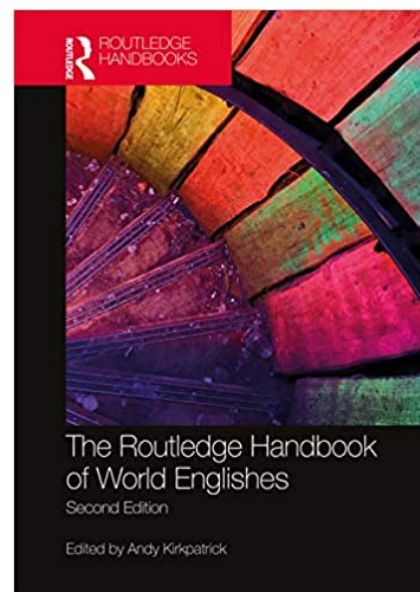
着用の必要性、掃除の徹底等の生活の諸注意を説明した。動画は、Yellow Bhutan (2021.2.19 現在、投稿数 127 件、フォロワー7,831 人) というインスタグラムがサポートとなっており、動画には、「わたしは、専門家ではないが、もしクルテップ語でこの状況について少しでも理解する必要がある人びとがいたら、その人たちにどうか(この動画を)教えてあげてほしい」と続いた。そして、「もしこのメッセージをあなた自身の方言(dialect)で共有したという人がいるなら、フェイスブックで Yellow Bhutan に原稿と BGM がほしいとメッセージを送ってほしい、自分でビデオを作ってみてはどうですか」と結んだ。このクルテップ語による動画に対して、早速、「ケンカ語(Khengkha)でも配信してくれないか」、「ゾンカ語がわからない農村の人たちにとっても役立つ」というコメントが次々と寄せられた。2020 年 3 月 27 日のこのクルテップ語による投稿から、約 1 年間、筆者が確認した 2021 年 2 月 10 日までに、「いいね」が 2,088、コメントが 154 件、720 件のシェアがあった。クルテップ語に続き、そのほかの民族語でのコロナウィルスの動画も次々と配信され、それは現在も続いている。

COVID-19 に対して迅速な対応を示した国家首脳陣が、その一方でゾンカ語か、英語か、でもめているとき、若者たちは、新しく手にした SNS という手段を通じて草の根で、確実に、今、すべきことを自分たちの手でやり遂げている。これまで民族語問題がついぞ上がってこなかったブータンであるが、7,000 メートルの山々を超えて侵入するほどの COVID-19 なら、そんなブータンにも新たな風を起こせるかもしれない。

【引用文献】

- 平山雄大 (2020) 「コロナ禍の中での学校～平山雄大のブータンつれづれ 55～」 <<https://www.waseda.jp/inst/wavoc/news/2020/10/15/5728/>> (2021.2.19)
- ブータン保健省 < Ministry of Health (moh.gov.bt) > (2021.2.19)
- ゾンカ語か英語か論争について Facebook に投稿された主張 : (<https://www.facebook.com/bigb.shering/posts/10163159257900453>)
- Facebook に投稿された各言語によるコロナ啓発動画の一例: クルテップ語の動画 (<https://www.facebook.com/watch/?v=669492197138160>) (2021.2.19)

書籍紹介



Chapter 18: English in Japan by Yuko Takeshita. *The Routledge Handbook of*

World Englishes (Routledge Handbooks in Applied Linguistics) 2nd Edition by Andy Kirkpatrick (Ed.), December 31, 2020.

らかじめ、編集担当の仲(nakac@gifu-u.ac.jp)までご連絡下さるようお願い申し上げます。

仲 潔 (岐阜大学)



柿原武史・仲潔・布尾勝一郎・山下仁(編)『対抗する言語—日常生活に潜む言語の危うさを暴く』三元社。2021年1月27日刊行。

ニューズレター編集担当より

無事、2020年度3号目となるニューズレターを刊行できました。会員の皆様のおかげです。ありがとうございます。

ニューズレターは会員の大切なコミュニケーションの場ですので、会員の皆様からのご投稿を歓迎しております。国内外の紀行文、本学会会員出版の書籍紹介(本学会の主旨に関連するもの)、海外情報など、「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、日本語 800~1,200字程度、あるいは英語では A4 用紙 2/3~1 ページ程度の分量でおまとめいただければ幸いです。編集の都合上、投稿を希望される方はあ

2021年3月22日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 竹下裕子(東洋英和女学院大学)

事務局長 相川真佐夫(京都外国語短期大学)

編集長 仲潔(岐阜大学)

事務局 〒226-0015 横浜市緑区三保町32

東洋英和女学院大学国際社会学部

国際コミュニケーション学科

竹下裕子研究室

E-mail: jafaeoffice@gmail.com

学会ウェブサイト: <http://www.jafae.org>

年会費振込先:

ゆうちょ銀行から振込

口座番号 00280-8-3239

他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行 支店 ○二九店(ゼロニキュウ)

口座 当座 口座番号 0003239

<< JAF AE Secretariat >>

Office:

c/o Professor Yuko TAKESHITA

Department of International Communication

Faculty of Social Sciences

Toyo Eiwa University

32 Miho-cho, Midori-ku, Yokohama-shi,

Kanagawa Prefecture 226-0015 JAPAN

E-mail: jafaeoffice@gmail.com

JAF AE's website

<http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number

00280-8-3239